

【学会見聞録】

第 37 回日本基礎老化学会に参加して

大澤 郁朗

東京都健康長寿医療センター研究所

去る 6 月 26、27 日の両日、あいち健康プラザで行われた基礎老化学会に参加した。健康プラザに行くのは初めてであるが、すぐ横にある国立長寿医療センターには何度かお邪魔したことがある。東海道本線大府の駅を降りて遙か丘の上だ。しかも健康プラザはもとより大府でも宿を取り損ね、交通の便を考えて名古屋市内の駅近くに宿を取った。それでも大府まで快速 20 分弱。シャトルバスにも乗り損ね、やっとの思いでたどり着いた頃には勉強するぞという気合いはどこかに行ってしまった。受付では遠藤昌吾先生がニコニコしている。お務めご苦労様。夜に備えて急ぎ懇親会のお金を払う。参加できないと夜はどうしたらよいか、大府には何かあるのだろうか、途方に暮れてしまうところだった。

ホールではすでにシンポジウム最初の演題が始まっていた。「Cellular Senescence and Aging」。演者は皆、この数年の間にトップジャーナルで成果を発表している素晴らしい先生たちである。しかも座長は三井洋司先生と後藤佐多良先生の両ご意見番。大会長である丸山光生先生の気合いが伝わってくる。寝ぼけた頭が急に起き出した。細胞老化に関わる DNA ダメージと細胞周期、これを制御する分子メカニズム。内容が濃く、普段の不勉強がたたって頭がすぐに飽和してしまう。彼らの優れた論文をもう一度読み返してみなくては。翌日午後のシンポジウム「Cellular Metabolism and Age-Related Diseases」を含め、聞くところによれば、招待された先生方は謝金も無しで引き受けてくれたそうだ。基礎老化学会の少々寂しい懐事情からすれば、なんと贅沢なシンポジウムだったことだろう。

次に驚いたのがランチョンセミナー。「A と B のどちらになさいますか？」と聞かれて複数有ることに気づく。それも 1 日目と 2 日目の両日である。4 つの企業にランチョンセミナーをお願いできるなんて凄い。しかも企業ブースが多数あり、プログラムには沢山の広告が掲載されている。これは 500 人から 1000 人規模の学会並みだ。丸山大会長を中心に大会関係者が相当ご尽力されたのであろう。せめて出店していただいた企業の皆さんがっかりしないよう、いくつかのブースに立寄り資料をいた

だいた。

フロアーには 60 を超える一般演題のポスターが貼られていた。私どもの研究室からも高橋真由美と村上弥生の両氏がそれぞれの仕事を発表し、皆さんから沢山のディスカッションをいただいた。この場を借りて深謝したい。口頭発表を含め、やはり場所柄、名古屋とその周辺の大学や研究機関から多数の演題があり話題を提供していただいた。ぜひ、次回以降も研究の続きを発表していただきたいものである。一方、東京をはじめとした他の地域からの発表は少し寂しかったかも知れない。一度発表したら次も発表したいと思うような魅力ある会を今後も重ねていく必要がある。

懇親会では、私のライフワークである水素分子医学について、後藤先生と色々なお話することが出来た。これだけで大府まで来た甲斐があったというものだ。テーブルに戻ると、伊藤雅史先生、稲垣玲子先生、白澤卓二先生が赤ワイン片手に談笑されている。皆さんのワインが無くなる速度の早いこと。ALDH2 マイナスの私には危険である。美味しい食べ物とウーロン茶と楽しいお喋りでお腹を満たした。

二日目の総会が終わり、充実した第 37 回大会が終了した。丸山大会長とスタッフの皆さんには感謝の言葉も見つからない。

余韻を残して、さあ東京へ帰るか。すると大府までのバスが来るまで結構時間があるらしい。タクシーもない。ここで私も含め気の短い 4 人が、長寿医療センターに向けて歩き出した。あそこは病院が併設されているからタクシーがいるはずだ。名誉のため誰かは伏せておく。着いたがタクシーは無く、結局のところ路線バスを待つはめになった。バスはセンターを出て再び途中停車の健康プラザへ。すでに大会参加者の姿は無い。後で聞いたら、皆は早々と出してもらったシャトルバスに乗り楽々と帰られたそうだ・・・。名古屋駅の新幹線ホームで声をかけられた。振り返るとそこには石井恭正先生。なんだ、そんなに遅くなったわけではなかったのだと自分を納得させて家路についた。